

症 例

心エコー検査で右室内転移性腫瘍を疑われた一症例

村上総合病院、検査科

富 樫 智恵美、福 原 成 子、平 山 テル子、梶 原 義 市
青 木 芳 則

背景：心エコー検査は、簡便かつ非侵襲的な検査法であり心臓の形態学的変化、機能を分析するのに適している。またドプラ法によれば血流状況の把握も可能となっている。また、心臓腫瘍は原発性、転移性に分類され原発性のものは稀であり、その頻度は剖検例の0.0017%~0.28%で転移性は、その20~40倍を占めるとされているが特異的な臨床症状に乏しく生前診断は困難でたとえ診断されたとしても心転移と同時に他臓器への転移が認められることが多く予後の不良な疾患である。

症例内容・結論：今回、舌癌手術後に胸痛を主訴に当院を受診し、心エコー検査にて右室自由壁心筋への転移が強く疑われた症例を経験した。

キーワード：心エコー検査、転移性心臓腫瘍、胸痛

背 景

転移性心臓腫瘍は、無症候性のことが多いとされるが臨床的には腫瘍の心腔内への突出による血流障害、またその部位によっては不整脈や伝導障害、ST-T変化などの心電図異常、胸痛や心不全症状、血栓症などが起こり得るとされている。また心臓腫瘍の存在やそれによる合併症の有無を判定するうえで心エコー検査は、極めて有用な方法である。

今回、舌癌手術後7ヶ月後に転移が心臓に最初に疑われた一症例を経験したので報告する。

症 例

75歳 女性

主訴：胸痛

現病歴：H11. 5. 26. 近医にて高血圧症・口内炎の治療中、舌の腫瘍を指摘された。

5. 27. 当院耳鼻咽喉科にて扁平上皮癌と診断された。

7. 05. 新潟大学附属病院にて右舌亜全摘術施行後退院した。

H12. 2. 06. 胸痛を訴え、狭心症の疑いにて当院内科入院。

入院時現症：体温36.3度、心拍数90/分、

血圧186/88mmHg。

入院時検査所見：

(血算) RBC403万/μl、WBC3600/μl、

Hb123g/dl、PLT122万/μl。

(生化学検査) GOT14 IU/L、GPT7 IU/L、LDH183 IU/L、CPK30 IU/L。

(心電図) 洞調律、不完全右脚ブロック、V1~V3で2mmのST上昇、V4で1mmのST上昇。

(胸部X線) CTR68.7%、肺野正常。

(心エコー検査) 右室自由壁に腫瘤様の肥厚を認める。左室壁運動異常なし。

心嚢液少量。

(腫瘍マーカー) SCC抗原4.5ng/ml。

入 院 後 経 過

入院後、血管拡張剤の持続点滴開始。胸痛の自然軽快に伴い5日後点滴中止。心原性酵素の上昇や心電図の経時的変化はなく、10日後運動負荷検査の結果も含め虚血性心疾患は否定的であると考えられたため当院内科は退院となるが心エコー検査にて右室壁肥厚・腫瘤を認めていたため精査目的に新潟大学附属病院第一内科、耳鼻咽喉科へ紹介転院。新潟大学附属病院内科では、平成11年9月に心エコー検査が施行されており、その時点では、腫瘤は認められていないこと、舌癌の手術が根治手術でなかったこともあり心臓への転移が強く疑われた。症状は、急速に進行し、多量の心嚢液を伴い末期の心不全となった。延命治療は、本人・家族が希望しなかった。平成12年4月10日より当院耳鼻咽喉科に再入院。全身性消耗状態となり4月25日心停止し永眠された。

考 察

頭頸部腫瘍の遠隔転移先臓器としては肺が最も多く、骨、肝がこれに次ぐ。心転移の頻度は、7.3%、2.2%、3.7%などの報告が散見されるが、その大部分は臨床的に心症状を伴わず剖検などにより初めて転移が判明したものである。

今回の症例では、病理学的な検査がなされていないため疑いの域を出ないが、臨床経過より舌癌の転移の可能性が最も高いと考えられる。胸痛を初発症状として狭心症を疑われ循環器内科へ入院となり心エコー検査で最初に転移性心臓腫瘍の疑いを指摘し得た稀な症例としてここに報告する。なお胸痛は、心電図所見からも癌浸潤による心膜炎によるものだったのではないかと推測される。

5月に入り、新潟大学附属病院内科より剖検の依頼があったようですが時期すでに遅く病理学的確定診断に至らなかったわけです。

文 献

1. 心臓腫瘍.領域別症候群シリーズ No.14, 循環器症候群J, 日本臨牀社
2. 細田瑛一・杉本 恒明. 心臓病学.南江堂
3. 耳鼻頭頸 1996;68 (1).

英 文 抄 録

Case Report

A case suggested as metastatic tumor in right ventricle by echo examination

Murakami General Hospital, Department of Laboratory 1) and Department of Internal medicine 2)

Chiemi Togashi, Naruko Fukuhara, Teruko Hirayama, YOshiichi Kohara 1), and Yoshinori Aoki 2)

Background: It was conceivable that the possibility of the metastasis of cancer of the tongue was suggested because of its clinical progress, although it remained doubtful because the definite pathology could not be obtained.

Case and Conclusion: We reported here a case which was suggested angina firstly and estimated as the metastatic heart tumor.

Key Words: echogram, metastasis in heart, case report